

パリでの研究休暇

松井 泰子

東海大学理学部情報数理学科

yasuko@tokai-u.jp

1 プロローグ

2014年度の後半、私は人生2度目の研究休暇をパリで過ごした。本稿ではパリ行きが決まった経緯と、世界中でパリだけに存在する、40か国によって運営される「パリ国際大学都市」などを紹介したい。パリ滞在のきっかけは20数年前に遡る。

2 国際会議での発表(1990年代前半)

パリとは縁がある。初めての口頭発表はパリでの国際会議だった。修士2年の夏、学生時代の最後の思い出に、パリの *École Normale Supérieure* (ENS) で開催された日仏組合せ会議 (Franco-Japanese Days. 以後、フランコ・ジャパン。) に参加した。フランコ・ジャパンにて、日頃セミナーで一緒している日本人研究者のグループが発表するので、金魚のフンの物見遊山の同行だ。初めてのヨーロッパ訪問に浮き足立ち、ツアー参加気分だった。

会議の10日前、同行者達と普段通りのセミナーを行った時、つい数日前に出た結果を披露した所、セミナーの主催者でありフランコ・ジャパンの日本側オーガナイザーの福田公明先生が、「面白いじゃない。フランコ・ジャパンで発表したら？せっかく参加するんだから。今まで英語で発表したことある？」

「日本語でも無いです。」

「…まあいいじゃない。やってみたら？経験は大切だから。(フランス側オーガナイザーの Michel Deza¹に言うておくよ.)」

こんなに簡単に事が進んで良いのだろうかと思いつつ、人生最初で最後の機会だろうからと、講演させて頂くことにした。それから10日間、旅行気分は吹っ飛びOHPシート(懐かしい)の準備と英語のセリフの暗記に追われることになる。

私の講演は午前の最後のセッションであった。昼休みを削ってプログラムに押し込んで頂き、講演時間は短めの15分に設定されていた。司会は福田先生で、最初に

「彼女は初めての口頭発表だから、皆さん温かく聞いて下さい。」

と添えて頂いたのを覚えている。当然質問は無く、会場の皆さんは「良かったよ。」と笑顔で声を掛けて下さった。旧き良き時代の思い出である。この会議はこじんまりしていたがオーガナ

¹ロシア出身の数学者。正式には Michel Marie Deza. 若い時にパリに亡命した。前原潤先生から伺った話では、Deza という Family name はフランスに来てから名乗ったそうだ。パリの電話帳を調べ、掲載されていない Family name だったのが決め手だと聞いた。

イザーは ENS に所属していた前出の Michel Deza が務め、フランス（ヨーロッパ）側の出席者には Yannis Manoussakis, Alexander Schrijver, Monique Laurent, Günter M. Ziegler, Antoine Deza 等², 現在の組合せ分野を支える蒼々たるメンバーがいらした。

バンケット会場は、ENS から徒歩圏にあるフランス側のオーガナイザーの 1 人である Pierre Rosenstiehl 邸の中庭であった。高級住宅街の蔦の絡む高い塀のドアを開けると手入れの行き届いた庭が広がり、テーブルの上にはご馳走が並び映画のワンシーンのようだった。参加者は家族同伴でバンケットに参加され、Yannis はお揃いの洋服を着た 3 人の小さな息子達を連れていたのを覚えている。この時、20 数年後に Yannis にホストをお願いしてパリに滞在し、バンケットで見かけた幼い長男と研究室をシェアするとは誰が想像しただろうか...

3 茗荷谷セミナー (1990 年代前半)

30 年くらい前、都内に「茗荷谷セミナー」という秘密結社のような組合せ最適化セミナーがあった。主催者は、当時、筑波大学大塚キャンパスの社会人大学院に勤務されていた福田公明先生 (ETH Zürich) だ。最寄りが茗荷谷駅であったため茗荷谷セミナーと呼ばれていた。

福田先生の前職は東京工業大学の小島政和先生の助手であったので、茗荷谷セミナーの出席者は福田先生に学生時代お世話になった田村明久氏 (慶應義塾大学), 松井知己氏 (東京工業大学), 並木誠氏 (東邦大学), 池辺淑子氏 (東京理科大学) とその関係者が多く、IBM 東京基礎研究所に勤務されていた徳山豪先生 (関西学院大学) も時々参加されていた。セミナーは毎回アグレッシブで、時には福田先生が海外から招聘された研究者も講演された。私が David Avis 先生とお目に掛かったのも本セミナーである。

茗荷谷セミナーでは半年ごとに打ち上げがあった。大塚キャンパスは学生が社会人であったためか校舎の一角にミニキッチン付きのサロンがあり、そこでの打ち上げだった。福田先生がご自宅から運ばれた赤ワインを皆で味わい、ピザ・お寿司・フランスパン等を食べながら、海外での研究やワインの蘊蓄に花を咲かせたのが懐かしい。

福田先生は博士課程で Waterloo 大学に留学され Jack Edmonds に師事し、そこで奥様の Vera 先生と知り合って学生結婚されたこともあり、海外事情に非常に詳しくあった。福田先生は Deza とは彼が Edmonds の所に滞在した時に知り合ったという。科研費が海外出張に使用できず、今ほど自由に海外渡航できなかった時代³, 福田先生の話をも夢物語のように聞いていた。

茗荷谷セミナー自体は、福田先生がスイスに異動される 1993 年まで続き、その後、場所を変えて有志で数年続けていたが自然消滅した。1999 年から私は筑波大学の八森正泰氏、東京大学の柏原賢二氏と組合せ数学セミナー (COmbinatorial MATHematics SEMinar, COMA SEMI. 通称コマゼミ。)⁴ を立ち上げ、年 2 回、ゼミ後にワインパーティを開く文化は継承している。

²Yannis は後にパリ第 11 大学の情報科学研究所所長となり、2020 年から 5 年間は IUF (フランス大学学士院) のメンバーの資格を得た。Schrijver と Monique は結婚され、Zigler は 2018 年から FU Berlin の学長を務める。Antoine は Michel の息子で、現在、カナダの McMaster 大学で要職に就かれている。

³海外の国際会議に参加する時は、民間財団の渡航費援助を当てる必要があった。

⁴コマは、開催場所の東京大学駒場キャンパスも引っ掛けている。幹事には電気通信大学の岡本吉央先生が入られたこともある。 <http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~hachi/coma/>

4 研究休暇先の決定 (2013年)

2014年9月から半年間の研究休暇許可が下りたとき、真っ先にパリを考えた。修士2年のフランコ・ジャパンへの出席以来、パリには出張等で10回位訪れており、パリ市内の移民が多く人種のるつぼという雰囲気や食文化の豊かさが魅力的で1度住んでみたいと思った。しかし、Dezaは既にリタイアしており他に懇意の研究者もいないので早々に諦めた。次に頭に浮かんだのはモントリオールだが、2003年、初めての研究休暇の取得時に夫婦でお世話になったDavid Avis先生はMcGill大学から京都大学に異動されているので、ここも候補から外れた。色々考えた末、統計数理研究所の伊藤栄明先生⁵に相談することにした。

伊藤先生とはパリで開催されたフランコ・ジャパンで知り合い、その後も秋山仁先生主催の東京理科大での国際会議で何度かご一緒している。顔の広い伊藤先生なら、私に適した先生を紹介して頂けるのではと思い、厚かましくもメールで相談すると、探してみましょうと二つ返事でご快諾下さった。伊藤先生はニューヨークに短期滞在中との事だったので、アメリカの研究者を紹介して頂けるのかも勝手な想像をした。伊藤先生はすぐに打診のメールを書いて下さり、そのメールは私にもCCされた。宛先はDezaだった。

「私達の友人のMatsui Yasukoさんが、研究休暇の滞在先を探している。どこか心当たりはありますか？」

という伊藤先生の問いに、Dezaはすぐに、

「YasukoにはYannisの所が良い。」

と返信し、そのメールはYannisにもCCされていた。あれほど悩んだ滞在先が(Yannisや私の意思とは無関係に)僅か2日間で決定したのである。

Dezaがホストとして紹介して下さい下さったYannis Manossakisは、パリ第11大学(Paris - Sud)の情報科学研究所(Laboratoire de Recherche en Informatique. 以後、LRI)⁶の研究所長だ。フランコ・ジャパンで初めてお目に掛かってから20数年の月日が流れ、その間、何度か研究集会で一緒したが個人的に口をきいた事は無かった。Yannisは縁が薄いにも関わらず多忙の中、私の滞在を快く引き受けて下さり心から感謝している。

5 パリ滞在 (2014年～2015年)

5.1 パリ国際大学都市

パリへの渡航が決まった時、頭の中で妄想が膨らんだ。石畳に面したアパルトマンの屋根裏で、階下から聞こえる雑踏のざわめきに耳を傾けながらエッフェル塔を眺める自分。一人舞い上がったが、実際は、パリ国際大学都市というエリア内の中の、玄関脇に金魚が泳ぐ池のある日本風のお城の天守閣あたりに滞在することになる。

⁵大学から支給された男女共同参画社会推進関連の予算を利用して、伊藤先生の所で学位を取得された方に、私の研究室の研究員として半年間勤めて頂いたことがある。

⁶LRIの所員の半数は、パリ第11大学との兼任でYannisもその一人だ。パリ第11大学は世界大学ランキングでは40位くらい、数学はプリンストン大学に次ぎ、フィールズ賞受賞者も複数排出している(と知ったのは研究休暇から帰国してからだった)。

パリでの滞在先は、Yannis の家からトラムで2 駅のパリ国際大学都市 (Cité Internationale Universitaire de Paris. 以後、シテ)⁷内のメゾンに決めた。シテは、パリで学ぶ世界中の学生、研究者、芸術家が滞在するための40 カ国が経営する40 のメゾンからなる宿舎群である。シテは一つの街だった。運動場はもちろん、劇場、プール、銀行、カフェ、食堂、図書館等が揃っている。約5,500 人の学生や研究者が居住し、その出身国の数は130 以上におよび、それぞれのメゾンは自国出身の居住者を全体の7 割以下におさえ、残りは他国に解放し、居住者同士の国際交流を促すようにしている。滞在期間は3 年が上限で、空きがあれば一週間の滞在も可能である。

シテ内の日本館 (Maison de Japon)⁸ への申込は、日本館の館長⁹宛に日本語でお願い出来た。もし日本館に空きが無ければ他の国のメゾンに回される。この歳になって人生初の寮暮らしだ。日本語の全く通じない不自由な環境で、周囲に迷惑を掛ける事は避けたいと日本館の館長に懇願した結果 (?), 日本館に入れて頂くことになった。

日本館は小田原城のような外観の7 階建てのメゾンで、6 階に入居した私は天守閣にいる気分だった。眼下には、外壁がピンクで窓枠が白い可愛らしいイタリア館、斜め前にはムーミンが住んでいそうなクリーム色のスウェーデン館 (私の中ではムーミンはスウェーデンのキャラクターである。原作はスウェーデン語で執筆されている。) が望め、住み始めた頃は、他の国が運営する典型的なヨーロッパ風のメゾンを羨ましく思ったものだ。

私は日本館で何ものにも代えがたい経験と多くの知人を得た。月に一度の持ち寄りパーティ、居住者の音大生によるコンサート、お正月の餅つき等のイベントを通し、居住者の若い人や他分野の研究者達と交流する機会に恵まれたのだ。皆さんのご専門は、文学、経済、哲学、法律、社会学、音楽、美術、服飾、農業、物理、天文、機械、薬学、建築等とバラエティに富み、日頃、情報科学や数学関係者にしか接しない私には新鮮な環境であった。文系や芸術系の方々は仏語が堪能なため日本人以外との交流も盛んだったが、理系研究者は (私を含め) 仏語が話せる人が殆どおらず、日本人同士で集まる事が多かったのは少し残念ではあった。

日本館に滞在して数か月経ったある日、理系若手 PD 研究者の有志が運営する、月に一度のセミナーにお誘い頂いた。土曜日の午後、順番に分野の異なる研究者に相互の専門を披露するセミナーだ。セミナー後、半地下の会議室で打ち上げをした。テーブルを囲んで持ち寄った料理とワインを堪能しながら、(理系というくくりで) 分野の近い研究者達とのお喋りは楽しいひとときであった。思えば、PD 研究者の皆さんは職場で唯一の日本人であったため、日本語で議論する機会を欲していたのだと思う。今なら、時差はあるが Zoom で日本の会議に自由に参加できるので状況は異なるかもしれない。

⁷パリ南端第14 区に位置するパリ国際大学都市は1925 年に創設され、34 ヘクタール (TDL が51 ヘクタールなので7 割位の大きさ) の広さがある。パリの高等教育機関や研究機関に在籍する世界各国の学生や研究者に宿舎を提供し、あわせて文化・学術の交流を推進することを目的とした学術施設で、世界中でこのような施設はパリにしかない唯一無二の場所だ。

⁸正式名称は「パリ国際大学都市日本館一薩摩財団」である。日本人実業家の薩摩治郎八が、私財350 万フラン (現在価値10 億円) で建設し、日本政府に寄付したのである。正面玄関突き当りと講堂の背景には、藤田嗣治が描いた豪華な絵が飾られている。日本の城を模した地上7 階・半地下1 階の建物は、フランス人建築家が設計したそうだ。日本館には過去、岡潔等、著名な学者達が滞在している。 <http://maisondujapon.org/about.html>

⁹2 年任期で、日本の大学の専任教員が務める。



左：パリ国際大学都市のメインゲート。右：日本館 (出典：Wikipedia)。



日本館でのパーティ後の集合写真。前列右から2人目が私。
日本館滞在者の半数が女性だったが、理系女子は東工大の院生と私のみだった。

5.2 情報科学研究所

パリ第 11 大学はパリ郊外にある。シテ真正面の RER（公共鉄道）の B 線「大学都市」駅から南に 30 分下りさらにバスに 20 分乗車する。その付近は森の中に大学や研究施設が点在しバス利用者も大学生と研究者のみだ。パリ第 11 大学の手前はエコール・ポリテクニーク¹⁰で、バスは構内を通過する。エコール・ポリテクニークでは乗馬が必修で、乗馬をする人の横をバスがすり抜けると、のどかな気分になった。

研究所の LRI はパリ第 11 大学のキャンパスと道路を挟んだ場所にポツンと建ちトウモロコシ畑に囲まれていた。私がお借りした研究室は最上階の 3 階のフロアにあり周囲の研究室には中国人の学生が多かった。Yannis のグループの主任研究員の Hao Li が精力的に留学生を受け入れていたからだ。¹¹ 研究所内全体では中国人留学生が 20~30 名いただろうか。当時、フランスの公立大学の学費は国籍に関わらず年間約 5 万円程¹²で留学生が大挙していたようだ。

研究室には 3 つの机があった。奥の机は Antoine Deza が使用していたので、私はドア脇の机を使用する事にした。Antoine は当時、7 年間のあいだ毎年 3 か月間 LRI に訪問研究員として滞在する契約を取っていた。後日、3 つめの机は Yannis の長男の George が使用することになった。George は Yannis のグループの博士課程に入学し Antoine に師事したのだ。George とは実に 20 数年ぶりの再会で、小さな坊やは見違えるような立派な青年に成長していた。

研究所では、お昼になると Yannis のグループの中国人の学生が呼びに来てくれ、研究所から徒歩 10 分位にある学食へランチを食べに行った。Yannis は毎日午前中に会議があり、昼食は自分の車で学食に行って食べる事が多かったようだ。学食までの往復は両脇が雑木林の田舎道で、往復の道中、中国人の学生達との雑談を楽しんだ。ある時、学生の一人から尋ねられた。

「Yasuko はどんな奨学金を利用しているの？」

中国からの留学生は、皆、何かしらの奨学金を受けていた。私は年増の学生だと思われていたようだ。Professor だから奨学金は貰っていないと答えると非常に驚かれ、中国は Professor になるのは難しいよ、日本はなり易いの？と問われ、大学によるかなとお茶を濁した。

LRI での滞在中、横浜市立大学の藤田慎也先生、名古屋大学の小野廣隆先生、大館陽太先生が遊びにいらして下さり Yannis のグループと共著論文が書けたのは嬉しい成果であった。宇野毅明先生は出張途中のシャルルドゴール空港での乗り換え時間にお茶をご一緒して下さいました。



情報科学研究所（出典：<https://www.centralesupelec.fr/en/lri-computer-research-laboratory>）

¹⁰ ナポレオンによって創設された軍学校が始まりでフランス軍事省の配下にある。理工系グランゼコールの一つ。20 年前にここで Deza が日仏会議を開催したとき私は寮に宿泊させて頂いた。

¹¹ 日本人のグラフ理論研究者も積極的に受け入れ、横浜市立大学の藤田慎也先生、日本大学の善本潔先生、電気通信大学の前澤俊一先生も LRI に滞在されたことがある。

¹² 最近法律が変わり、EU 国籍以外の留学生には 10 倍の授業料が課せられるようになったが、それでも年間約 50 万円だ。イギリスの博士課程の場合、EU 国籍の学生は約 65 万円、EU 国籍以外の学生は約 300 万円だそうだ。

6 Michel Deza との思い出

Deza¹³とはフランコ・ジャパンで初めてお目に掛かって以来、国内外の会議で何度もお会いしている。Deza は会うといつも「元気だったか？」と笑顔で温かい言葉を掛けて下さる優しい人だった。以前から、日本人や中国人には研究面でサポートが必要だと仰り、フランコ・ジャパンもそのような考えで始められたようだ。

パリでの滞在が落ち着いた頃、Deza の自宅に招かれた。地下鉄の駅からすぐのマンションには古い造りには珍しく外付けでエレベータが設置されていた。パリには築 100 年以上のマンションは普通で、エレベータやクーラーが無いのが当たり前なので珍しく思った。Deza は後年、元々悪かった足と腰の具合が悪化し難儀そうに歩いていたのを思い出す。

部屋のドアを開けると、いきなりペットの白いオウムが飛んで来て私の頭にとまった。広いリビングの片隅には電話ボックスのような鳥カゴが設置されており、私達が談笑する間、オウムは Deza の肩に愉快そうに留まっていた。リビングの飾り棚には大きなパズルが並び、その内の一つは秋山先生が遊びに来た時のプレゼントだと教えてくれた。

Deza はもうすぐ入院して腰の手術をするという。以前、腰の片側を手術しており、同じ手術を反対側にもするのだが、手術自体は大したものでは無いけれど、ベットから動けないのが退屈だと言っていた。そんな体調でもここ数年は年に 3 か月ブラジルに招聘され講義をしていた。

「ブラジルの学生は皆、目を輝かせながら講義を聞いてくれる。それに比べ、最近の日本人の学生は覇気が無い。」

と嘆かれ耳が痛かった。続けて自分の弟子で優秀なのは、Péter Frankl (ピーター・フランクル)、Monique Laurent, Mathieu Dutour Sikirić の 3 名だと仰った。話を伺いながら Péter が書いた日本語のエッセーに若き日の Deza の写真が掲載されていたのを思い出した。

帰国後しばらくして、Deza から私の Facebook に承認依頼が届いた。75 歳で Facebook を操るとはやはり只者では無い。ある日、私が Facebook に近日開催の秋山先生の国際会議の宣伝を投稿するや否や Deza からコメントが書き込まれた。

「こんなナイスな会議があるとは知らなかった。もう遅い。2 週間後別件で日本に行くが、飛行機のチケットを購入してしまった。」

とあった。残念ですねと答えると、

「Yasuko, 日本に招聘してくれないか。」

と続けて書き込まれた。

「私が冬にオーガナイズするセッションにならお招きできます。」

「オーガナイズドセッションでは駄目だ。Plenary だ。」

Deza くらいの研究者ならば、そのような待遇が当然である。慌てていたとはいえ、失礼な提案をしたものだと後で反省した。

「Plenary talk の機会は探します。でも私はお金(科研費)を持っていません。すみません。」

と書くと、ご自分の発表スライド(100枚)をメールで送り付けて来た。凄い行動力だ。これを持って営業活動しろという意味だと瞬時に理解した。Deza の行動はいつも性急だ。私は彼の

¹³Deza は日本最良で息子の Antoine に博士課程進学先として東京工業大学の小島政和先生を勧めた程だ。また私が知る限りでは、福田公明先生、前原潤先生、秋山仁先生、小島政和先生、伊藤栄明先生、浅野哲夫先生、宗政昭弘先生が Deza を何度か日本に招聘している。

Plenary talk の機会と共に渡航費用の工面先を探すことになる。数日後、秋山先生の研究集会で日本大学の斎藤明先生に相談すると日本数学会の応用数学分科会の特別講演なら1年先になるが招待の見込みあると言われ、渡りに船とお願いした。相談してみるものである。しかし、話が順調に進んでいた2016年11月末、悲しい形で招聘話がなくなった。Dezaが自宅マンションで亡くなったのだ。消防車が10台も出動した大きな火事がありDezaはオウムと旅立った。



Deza とオウムの Dina. 写真は Facebook の Deza の追悼アカウントから拝借した。

7 エピローグ

パリでの一人暮らしの後、景色が変わった。パリでは楽しいことばかりでは無く2015年1月のシャルリー・エブド襲撃事件など、日本では考えられない様な事件も間近で経験したが、研究の他、日本館での他大学・他分野の方々との交流、パリ在住30年以上の日本人との出会い等、盛り沢山の経験から得る事が多く自分の中で何かが大きく変わったように思う。

これから海外滞在を考える若い方には、是非パリを、そして日本館滞在をお勧めしたい。



Yannis¹⁴の研究室にて。左から、Yannis, Sylvain, Renyu, Reza, 私, Zsolt, Raquel.

¹⁴この原稿を書き上げた直後の6月5日、コロナ禍でパリを離れ故郷のクレタ島に滞在していた Yannis は急逝されました。突然のことで言葉も見つかりません。安らかなお眠りをお祈り申し上げます。